

# カラスバト 英: Japanese Wood Pigeon 学: *Columba janthina*

## 1. 分類と形態

分類: ハト目 ハト科

全長: (カ) 370-435mm  
 翼長: (カ) 213-246mm (ア) 213-246mm  
 尾長: (カ) 149-177mm (ア) 140-168mm  
 嘴峰長: (カ) 18-21 mm (ア) 19-22 mm  
 ふた趾長: (カ) 30-37 mm (ア) 34-39 mm  
 体重: (カ) 約500g

※(カ)は亜種カラスバト[全長はBrazil(2009), 体重は東京動物園協会, その他は清棲(1978)による], (ア)は亜種アカガシラカラスバトの計測値(清棲 1978).

### 羽色:

雌雄同色。全身が黒く、頸に緑色の、肩に紫色の金属光沢がある。亜種アカガシラカラスバトの成鳥は頭部が赤い。幼鳥の体羽には金属光沢がみられない。



写真. 亜種カラスバト(左), 亜種アカガシラカラスバト(右)

### 鳴き声:

グルルッ、ウーウーッと押し殺したような声で鳴く。また少し高い調子でアウアウーッと鳴くこともある。飛翔しながらグルルルーと声を出すこともあり、威嚇行動と考えられる(日本野鳥の会 1998)。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

亜種カラスバトは、京都府冠島以南の本州および九州周辺の離島、伊豆諸島、奄美諸島、沖縄諸島、韓国の一部の離島に留鳥として分布する。アカガシラカラスバトは小笠原諸島に、亜種ヨナグニカラスバトは先島諸島にのみ分布する(日本鳥学会 2012)。

### 生息環境:

密生した照葉樹林を好む。アカガシラカラスバトは、小笠原諸島の湿性高木林のほか、乾性低木林、二次林、海岸林でも観察される。

## 3. 生活史



### 繁殖システム:

亜種カラスバトの繁殖期は2月から9月といわれているが、晩秋から冬にかけても幼鳥が観察されることがある(Baptista *et al.* 2014)。アカガシラカラスバトの繁殖は秋から冬がピークであると考えられるが、年間を通じて繁殖行動が観察される。

### 巣:

樹上に細い枝などを組み合わせて粗雑な巣を作る。宮崎県の枇榔島と小枇榔などでは地上営巣が確認されている(中村・児玉 2001)。アカガシラカラスバトは主に地上営巣し、タコヅルの藪やタコノキの根元などを利用する。

### 卵:

一腹卵数は1で、白色無斑。亜種カラスバトでは長径約43mm, 短径約30mm(中村・児玉 2001)。

### 抱卵・育雛期間:

飼育個体における観察では、抱卵期間は約19日、育雛期間は約1か月。抱卵とヒナへの給餌は雌雄が交代で行う。

## 4. 食性と採食行動

樹上で果実や種子を採食するほか、地上に降りて落下した果実や種子を採食する。伊豆諸島では主にツバキの種子を採食する(Gibbs *et al.* 2001)。アカガシラカラスバトは長時間地上で採食し、脂肪分の多いアコウザンショウ、キンショクダモ、アカテツなどを好むが、後述のように外来植物も高頻度で採食する(Ando *et al.* 2016)。

## 5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

### ● 島々を行ったり来たり

小笠原諸島の固有亜種であるアカガシラカラスバトは、飛翔能力が低く、島ごとに異なる集団として生息すると考えられてきた。しかし、2002年7月に父島で捕獲された個体が、同年10月に父島から約4.5km離れた弟島で確認されて以降、島間移動が次々と確認され、小笠原諸島を形成する聳島列島、父島列島、母島列島の列島内の移動は珍しくないということが分かってきた(鈴木ら 2006, 環境省関東地方環境事務所 2013)。さらに、父島と母島を含む小笠原群島の集団と、母島から約150km南にある北硫黄島の集団の間には遺伝的な交流があることが明らかになり、より広範囲で移動している可能性がある(Ando *et al.* 2014)。なぜ島間を移動するのかは分かっていないが、ひとつの理由として考えられるのが食料事情だ。小笠原諸島では島によって結実樹種が異なり、結実量も季節的に大きく変動する。大型の種子食鳥であるアカガシラカラスバトは、年間を通して果実を確保できる環境を必要とするため、限られた島の環境で十分な食物を確保することは難しいと考えられる。そのため食物を探して島々を移動し、それぞれの島で結実している果実を柔軟に利用しているのかもしれない。

### ● 亜種間交雑個体の発見

亜種カラスバトとアカガシラカラスバトは、頭部の色の違いから識別でき、遺伝的な交流もほとんどないことが示されてきた(Seki *et al.* 2007)。ところが、2012年9月から2013年2月にかけて、小笠原諸島の父島で、両亜種の交雑と考えられる個体が、2羽相次いで確認された(安藤ら 2015)。2羽のDNAは、それぞれの亜種の特徴をちょうど半分ずつ持ち合わせていた。この事例は、カラスバトが両亜種の生

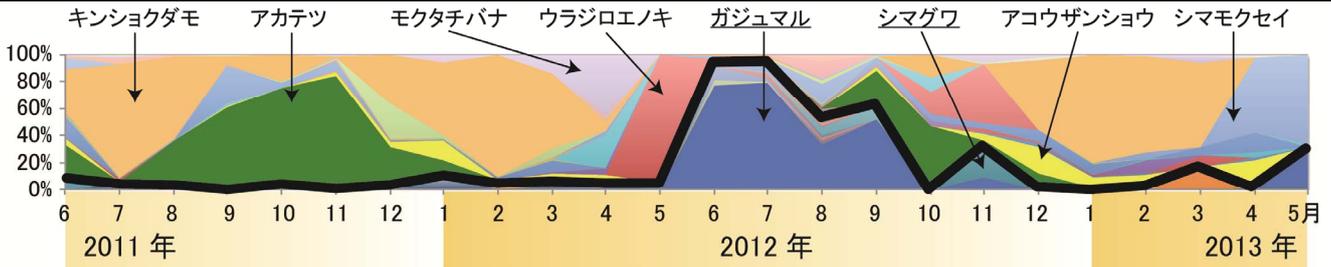


図. 糞のDNA分析から得られた父島のアカガシラカラスバトの食物構成の季節変化と検出された主な種子植物. グラフの太線は外来種の割合を、下線のある種名は外来種を表す. 2011年はキンショクダモとアカテツが豊作で、外来植物の利用は少ない.

息地の最短距離である350km以上の距離を飛行して交雑し、遺伝子の交流が生じたことを示す.

アカガシラカラスバトのように狭い島嶼地域に生息する小集団にとっては、このような偶発的な雑種形成が集団の遺伝的多様性の維持に重要な役割を果たしている可能性がある. 標識放鳥された交雑個体は、3か月後に父島の属島である兄島で観察され、小笠原諸島に定着しているようだ. この個体が繁殖能力を持つのか、持つとすればアカガシラカラスバトの集団構造に影響を与えるのか、今後の動向に注目したい.

### ● 外来植物は大事な食料！？

糞のDNA分析の結果から、アカガシラカラスバトは外来植物を頻繁に利用していることが明らかになった(Ando *et al.* 2016). 年によるが、在来の植物の結実量が少ない夏に外来種が利用されることが多いと考えられる(図1). 利用されている外来種は、在来種よりも脂肪含有率が低く、食物としての質は低いと考えられる. 好みの食物ではないものの、食料不足を補うためには必要なのだろう. 世界自然遺産に指定されている小笠原諸島では、外来植物の駆除が行われている. もし、アカガシラカラスバトが利用する外来植物を一度に駆除してしまえば、深刻な食料不足に陥るかもしれない. そうした事態を避けるためには、外来植物の駆除と同時に、食物が不足しがちな時期に結実する在来種を植栽するなどの対策が必要だろう.

### ● 外来捕食者の影響

大陸から隔離された小笠原諸島では、在来の哺乳類はオガサワラオオコウモリしかいない. こうした環境で進化したアカガシラカラスバトは地上からの捕食者に対する警戒心が低く、人が持ち込んだネコに捕食され数を減らしてしまった. 2008年に開催された国際ワークショップでは、最悪の場合、20年後にアカガシラカラスバトが絶滅する可能性が示された(堀越 2008). その後、地元と東京都獣医師会が一体となり、飼い猫の避妊手術や、山で捕獲したネコを内地に搬送して人に馴らし、里親を探すという地道な取り組みが続けられた結果、個体数が徐々に回復し、近年では集落近辺でも見られている. かつては幻の鳥とも言われたアカガシラカラスバトが、人前に姿を見せてくれるのは喜ばしいことだ. その一方で、交通事故や集落の飼いネコに襲われる事例が度々起きようになった. 人の生活の近くにやってきたアカガシラカラスバトと今後どのようにつきあっていくのか考えていく必要がある.

## 6. 引用・参考文献

Ando, H., Ogawa, H., Kaneko, S., Takano, H., Seki, S.I., Suzuki, H., Horikoshi, K. & Isagi, Y. 2014. Genetic structure of isolated islands and captive population of the critically endangered Red-headed Wood Pigeon *Columba janthina nitens*: implication on the management of threatened island populations. *Ibis* 156: 154-164.

Ando, H., Setsuko, S., Horikoshi, K., Suzuki, H., Umehara, S., Yamasaki, M., Hamya, G., Inoue-Murayama, M. & Isagi, Y. 2016. Seasonal and inter-island variation in the foraging strategy of the critically endangered Red-headed Wood Pigeon *Columba janthina nitens* in disturbed island habitats derived from high-throughput sequencing. *Ibis* 158: 291-304.

安藤温子・小川裕子・鈴木創・堀越和夫・中原文子・井鷲裕司. 2015. 小笠原諸島におけるカラスバト *Columba janthina* の亜種間交雑個体の初記録. *日本鳥学会誌* 64: 261-265.

Baptista, L.F., Trail, P.W., Horblit, H.M. & de Juana, E. 2014. Japanese Woodpigeon (*Columba janthina*). In: del Hoyo, J, Elliott, A, Sargatal, J, Christie, D.A. & de Juana, E. (eds) 2014. *Handbook of the Birds of the World Alive*. Lynx Edicions, Barcelona. (online) <http://www.hbw.com/node/54122>, accessed 2015-10-11.

Brazil, M. 2009. *Birds of East Asia: China, Taiwan, Korea, Japan, and Russia*. Princeton University Press, Princeton.

Gibbs, D., Barnes, E. & Cox, J. 2001. *Pigeons and Doves A Guide to the Pigeons and Doves of the World*. Yale University Press, New Haven.

堀越和夫. 2008. 最終報告書:アカガシラカラスバト保全計画作り国際ワークショップ. アカガシラカラスバト保全計画作り国際ワークショップ, 小笠原.

環境省関東地方環境事務所. 2012. 平成23年度アカガシラカラスバト保護増殖事業に関する調査等業務報告書. 環境省関東地方環境事務所, さいたま.

環境省関東地方環境事務所. 2013. 平成24年度アカガシラカラスバト保護増殖事業に関する調査等業務報告書. 環境省関東地方環境事務所, さいたま.

環境省関東地方環境事務所. 2014. 平成25年度アカガシラカラスバト保護増殖事業業務報告書. 環境省関東地方環境事務所, さいたま.

清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京.

中村豊・児玉純一. 2001. 宮崎県の枇榔島と小枇榔におけるカラスバト *Columba janthina janthina* の地上営巢例. *日本鳥学会誌* 50: 37-41.

日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.

日本野鳥の会. 1998. *カラスバトの生態と保護に関する調査*. 東京都, 東京.

真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. *日本の野鳥650*. 平凡社, 東京.

Seki, S.I., Takano, H., Kawakami, K., Kotaka, N., Endo, A. & Takehara, K. 2007. Distribution and genetic structure of the Japanese wood pigeon (*Columba janthina*) endemic to the islands of East Asia. *Conserv. Genet.* 8: 1109-1121.

鈴木創・柴崎文子・星善男・鈴木直子・堀越和夫・障子巳佐子・障子幹・坂入祐子・高野肇. 2006. 小笠原諸島におけるアカガシラカラスバト *Columba janthina nitens* の島間移動. *Strix* 24: 99-107.

## 執筆者

安藤温子 国立環境研究所 研究員

小笠原諸島の鳥類を対象とした保全生態学的な研究を行ってきました. メインの仕事はDNA分析ですが、フィールドワークも好きで、博士課程の頃は年間5か月くらい小笠原に滞在してカラスバトの調査をしていました. カラスバトの島間移動のパターンを、もっと詳しく知りたいと思っています.

